

さよならサリンジャー

Kusemono



白鳥文庫

目次

| | | |
|----|-----------------|-------|
| 序章 | アフターグロー | ————— |
| 一章 | プラネタルーム | ————— |
| 二章 | クラウディ | ————— |
| 三章 | アンバランスコミュニケーション | ————— |
| 四章 | ザ・サウンド・ライク・ユー | ————— |
| 五章 | 茜射す | ————— |
| 終章 | スターライト・ディスコ | ————— |

デザイン：en

装丁・本文レイアウト：Kusemono

表紙・本文イラスト：あんこ

「ねえママ。ここは何のお部屋？」

娘が丸い天井を不思議そうに眺めている。

「ここはね、星を見るお部屋よ」

妻が頬を寄せて優しく説明する。

「ママとパパはね、昔、ここで二人でお歌を歌ったのよ」

僕を見てあの頃のように微笑む。

僕はあの冬、ここで彼女と出会い、

——そして、別れた。



二章：：クラウディ

アレンジウインドウにオーディオトラックを追加して、ライブ러리から適当に選んだりズームループのサンプルを貼り付ける。

四つ打ちでなるべく無個性なやつがいい。BPMは128。
八小節分コピーしたらループポイントを設定して再生。

クリック。

夜中なのでスピーカーの音は控^{ひか}えめに——ヘッドフォンはミックスの時にしか使わない。

インタフェイス^かを介してパソコンに接続された鍵盤^{けんばん}を弾けば、インストウルメントトラックに設定したフエンダーローズの音色が返ってくる。

最初に鳴らす音は楽器や人それぞれで違うだろう。

僕の場合は鍵盤ならCメジャーセブン、ギターならA。理由は簡単。どっちもその楽器で一番簡単かつ最高にカッコイイ音だから。

ドからはじめて白鍵^{はっけん}を一つ飛ばしでド・ミ・ソ・シと押さえると、調和^{ちやうわ}したハーモニーの中で最高音と最低音が半音でぶつかってちいさなうねりを生む。

緊張感のある都会的な響き、と、一般的にはそう評^{ひやう}されることが多いけれど、僕には使い古した毛布^{けふ}についての毛玉みたいな懐かしい肌触り。音の感じ方なんてそんなもんだ。

鍵盤の正面に設置してある二枚の液晶ディスプレイのうち、右側のものにはあらかじめ打ち込んでおいた歌詞テキストを表示させてある。

ころころする毛玉の刺激で自分の感覚をチューニングしたら、思いつくままにコードの組み合わせを試し、単語に合わせてメロディーのフレーズを鼻歌で歌う。

テレビの砂嵐みたいな寂しくてあったかい曲にしたい。

気に入ったフレーズができたならそのままシーケンサーに打ち込み。

もう一トラック追加して簡単なベースも入れておく。

小節を移動して何パターンかのバリエーションで即席メモを作り溜める。

二時間ほどで六つのパターンが出来たので、あとは切って貼ってで一曲分に仕上げる。

マウスでぼちぼち、と。

知らない人にはとても音楽を作っているようには見えないだろう。

四分ちよつとのファーストデモが完成。

まだイントロ部分なんかはリズムループが鳴っているだけのものだけど、これを土台にして肉付けしていった——時には全部ボツにしてやりなおして——アレンジ、ミックス、マスタリングを経て一曲の完成となる。

デモをループ再生しながら昼間の出来事を反芻する。

唐突に僕の日常に割り込んできた、ちよつと変わった——いや、かなり変わった——女の子、ジエイデイ。

「私と、最高のさよならを決めてみない？」
そう言った彼女のたくらみはいまいち全貌ぜんぼうがつかめない。

「このプラネタリウムで、ライブをするの」

彼女はわかりしたコーヒーをブラックのまま口にしながらさりと言った。
そうすか。ライブするんすか。

この子はアイドルか何かで、そういうイベントが予定されている、ということなんだろう。確かに平均以上にはかわいいし、言われてみれば何か浮世うきよ離りれたオーラを放っている。しかしなにもこんなうらぶれた街のストリップ小屋みたいなプラネタリウムを選ばなくてもいいのに。絶賛ぜっさん売出し中の営業活動ってことなんだろうか？

一体それが僕に何の関係が？

疑問を挟もうと口を開きかけたところに、本日何度目かのカウンターパンチ。

「私とキミとでね」

クリーンヒット。んあ？ と、あいた口からそのまま疑問の声を漏らしてしまう。

私とキミでって、いつ結成しましたかねそのコンビ。契約書とか、男女の契ちぎりとか、そういうの、すっ飛ばしてないですか。

「このプラネタリウムを、私とキミの鬱屈うっくつしたパンク精神で埋め尽くして、タイクツな日常を

ぶち壊してやるのよ」

「え、や、ちよっと待って」

会って一時間も経ってない君と僕が一緒にライブ？

そりゃ僕もライブをやったことがないわけではない。高校時代にバンドの真似事で学園祭のステージに上がった程度だけど。だからといって、見知らぬ女の子と突然ライブをやりましょ、といわれて二つ返事でオーケーできる道理がない。それにそもそも。

「そもそも、僕の曲、パンクじゃないでしょ？」

パソコンに向かって一人で作っている音楽。一般的にはテクノポップとか言われるジャンルだと思っている。たまに自分でギターを弾いて混ぜることもあるけど、味付け程度であって基本はシンセサイザーミュージックだ。パンクって、あれだろ。ピストルズとか、クラッシュとか。ギターロック。んで労働者階級ろうどうしやかいきゅうなイギリス人。そりゃ僕も好きだけどさ。

「あれ、無自覚？　ちよっと残念かも」

片肘をついてため息。

「まあ、いいや。キミが立派なパンクスなのは私が十分わかかってるもん」

断言だんげんされてしまった。どうも彼女は僕が知らない僕を知っているらしい。

「いい？　パンクはロックだけじゃないし音楽だけじゃない。文学にも、絵にも、映像にも、あらゆる表現にパンクは宿っているの」

「反抗心はんこうしんってこと？」

パンクのイメージといったらまずそれだ。アナキー、イン、ザ、僕？

「アナキーズムはその発現はつげんの一端ね。パンクの真髓しんずいは無垢むくな衝動しょうどうと表現欲。そこから生まれた作品は形は違えど全てパンクなの」

乱暴な理論だけどわからなくもない。こうあるべき、と示しめされた道みちに従したがうことを良しとせず——受け入れられずに——自己の思想しゆきうを貫つらぬく。世間には時に滑稽こっけいだ、不謹慎ふきんしんだ、と罵ののられようと表現することを抑おさえられない原初げんしょの衝動。

それに「無垢」というキーワード。彼女がこだわるのは多分イノセンス、その部分なのだろう。だけど。

「だけど、僕のどこにそれがあると言うの？」

「いつか教えてあげるよ」

カップを両手に持つて含み笑い。いつか、つてなんだ。なんか着々と既成事実きせいじじつを作られている気がする。

「とりあえずキミは、来週までにその歌詞に曲をつけてくること」

はい、先生。わかりました！。

つて、言うわけないだろ！

その歌詞つて、彼女の書いた『プラネタルム』のことか？

いや、それ以前にライブがどうのつて、承諾しょうだくしてないんだけど。

「や、ちょっと待っ——」

「来週も来るんでしょ？ 楽しみにしてる」

またね、と彼女は僕の返事も待たずにそっくり残して、現れたときと同様の唐突さちやとつで去っていった。

取り残された僕を次に襲おそったのは、ジェイデイの会計を終えて、満面の笑みで『サービズ』しに来たしのさんの質問攻めだった。

ループしていたデモ曲の再生を止める。んで、さっき完成させたこれが『プラネタルーム』のデモである。なにがなにやらわからないまま結局こうやって曲をつけてしまっている自分がなんだか滑稽こっけいに思えてくる——もつとも言われる前からこの歌詞には曲をつけてみたかったから別にいいのだけど。と自分に言い訳いわげ。

「最高のさよなら」って何だ？

プラネタルームでライブって、常識的に考えてアリなのか？

いや、そもそもなんでプラネタルームで？

ジェイデイの話は考えれば考えるほどわからないことだらけで、悩むのが馬鹿らしい、というよりも何を悩んだらいいのかすらわからない。

ただなんとなく、彼女に従うことが苦痛ではない自分にも気付いている。Mっ気だけじゃなくてね。

改めてノートを開き、彼女の肉筆で書かれた歌詞を眺めていると、どこか痛切な想いが伝わってくるのです。

それが何かは今の僕には具体的にはわからないけれども、その想いの根っこはどこかは、僕自身と繋がっている、という気がするのには思いがりだろうか。

いや、下心しんしんだろ？ と僕の肩越しに自答する黒い犬に頭突きをくらわせて黙だまらせた後、彼女のパーカーの胸に並んだバッジを思い出す。

——正確にはバッジの並びを不規則に歪ゆがめているその稜線りょうせんを、だけでも。



今週は獅子座流星群ししざりゅうせいぐんが観測できるピークが来るらしく、館長の解説はいつにも増して興奮気味こうふんきみだ。そのままUFO番組で討論とうろんできそうな勢いですよ。

プラネタリウムはいつもの三倍は客が入っていた。流星群の話題がニュースでも取り上げられることが多いからだろう——それでも空席の半分も埋まっではないのだけだ。

僕はいえは年に一度の天文ショーにも特段とくだんの興味があるわけでもなく——どちらかといえれば普段空なんか見ないくせにこんな時だけ群むらがる大衆心理に持ち前の天邪鬼あまのじやくな思考で唾つばを吐きかけながら——いつも通り目を閉じて館長の発する音声に身を委ゆだねていた。

ジェイデイは今日も真正面、北端の席に一人で座っている。

開演前、彼女があつかましいともいえる勢いでやってきて僕の隣の席に座るんじゃないかと危惧していた。

いや、正直なところ半ば期待していたさ。

プラネタリウムで女の子と隣同士、つて、ふとした拍子に触れ合う手、つて、そりゃちよつとは体験してみたいシチュエーションだろう？

わーきれい。いや、きみのほうがきれいさ。つて馬鹿。

だけど僕より遅れて開演間にドームに姿を現した彼女は、僕のほうにはまったく目もくれずにいつもの席へ向かったさね。ブラヴォー。パパラパー。

そうしてつくりものの空の下、僕らはドームの端と端で以前と何も変わらず各々の世界に浸っている。

ガツカリしないといえれば嘘だけど、実は落胆よりも安堵のほうが大きい。

この時間は僕ひとりのものだ。それはたぶん彼女も同じなんだろう。ただいつもと少しだけ違うのは、操作ブースの光におぼろげに浮かぶ彼女の姿を時々薄目を開けて確認してしまうことだけであつて。

狭いドームだ。距離にしたら僕のアパートの、玄関から部屋の突き当たりくらいだろうか。やば、デスクトップのあのフォルダ、隠したつて。つて、想像した距離感がリアルすぎて心拍数が一段上がる。——ああ、調子狂う。

上演が終わり、半覚醒はんかくせいのアタマで出口の混雑を避けて席に留とどまっている間に、彼女の姿は見えなくなっていた。

いつもならこのまま真まっ直すぐシャガールに向かうところだけど、そうするのもなんだかノリ気なように思われそうで悔しい。それで悔しいと思ってる自分が悔しい。なにこれ。だって僕のほうが年上なんだよ？ いいようにあしらわれて、なんてざまなんだ。

ドームを出てあてもなくフロアをうろつき回り、エントランス前に置かれたパンフレットなんかをなんとなく手にとってみる。

「今月の上映予定」「天文教室のご案内」「リニューアル工事に伴ともなう休館のお知らせ」「郷土資料館だより」なんて見出しを目で追ってみるものの、ふむ、まったく頭に入いってこないなこれ。どうした自分。

そもそもそんなものでたいして間がもつはずもなく、パンフレットを戻し、目に付いたトイレに向かう。

いつもより念入りに時間をかけて手を洗いながら独ひとりごちる。

鏡に映った僕は眉毛を描かれた犬みたいな情けない顔をしていた。お前のご主人様はまったくひどいやつだな。くうーん。

この落ち着かなさは悔しいだけじゃなくて。謎だらけの言葉を残して（美）少女からおあずけを食らった一週間。手元には彼女の筆跡ひっせきが残るノート。作曲のために何度も反芻はんすうした会話と表情。

ぐるぐるぐると回る思考の果ての果てであらぬ想いが募つてしまうのも仕方がないだろう？　ほら、いつのまにか（美）とかつけちゃってるし。

そうして他に時間をつぶすいいわけが見つからなくなった健全なる青少年たる僕は、ままならぬ想いを抱えて、心を乱す（美）少女の元へ向かう、のである。くうーん。

シャガールのドアを開くと、待っていたのは眩しいほどのピンク色の光線を放つしのさんの笑顔だった。

「もう、遅いです。彼女、待ってますよー」

彼女、という言葉に過剰な反応を示す僕のピュアハート。多分しのさんは何か革命的に誤解をしているのだからうけれど訂正するのも厄介だ。彼女、英語で言えばシーね。ガールフレンド、じゃない。うん。

彼女であるところのジェイデイはいつものカウンター席ではなく、僕の指定席——と勝手に決めているだけの窓際のテーブル席——に座って、相変わらず『ライ麦』を読んでいた。

待ち合わせ、というシチュエーションがなんとも言えず気恥ずかしい。

どう声をかけたら良いかよくわからず、とりあえず曖昧な笑顔でそちらへ歩み寄り、「お疲れ」と言いながら彼女の向かいに座る。ああ、日本語って便利よね。

彼女はといえば、本から目だけ上げて僕を見て

「じぎげんよう」

と一言。

ごきげんよう、ときた。日常生活でこんなセリフを聞くとはついぞ考えていなかった。えっと。お昼の番組、見た？ とか、そういう井戸端いどばた的質問のフリーズじゃないよね。

すぐに本に戻ってしまった彼女になにか言わなければいけない雰囲気ふんいきを察して、あわてて返す。「ご、きげんよう」

たぶん生まれてはじめて言った。イントネーションがおかしかったような気もするがそこはつつこまないで欲しい。

「よろしい」

彼女はもう一度ちらりと目を上げてそう言うと、しおりも挟まずにいきなり本を閉じてテーブルに置いてしまう。読んでいる、というよりはそれこそ聖書のようにその時々に必要な箇所かしよを開いている、という感じなんだろうか。

僕がしのさんにアイスコーヒーを頼むのを待って、彼女は大げさに首を振りながらため息をつくと

「キミ、言葉は大事にしなさい。私、疲れているように見えた？」

そう言ってジェイディは僕を軽く睨にらんだ。

一週間の葛藤かつちゆうが馬鹿らしいくらいに飛躍ひやくした会話は相変わらずの勢いで展開されて、僕はあつというまにその奔流ほんりゅうに飲み込まれてしまう。

まあ、これが快感になりはじめているのを認めないわけにもいかないのだけだ。

どうも僕が「お疲れ」と言ったことがお気に召めさないらしい。まさかのトラップ。環境擬態系かんきょうぎたいのやつです。

「日本語には素晴らしい挨拶あいさつの言葉がたくさんあるでしょ？ きちんと選択して活用しないと
もつたいない。言葉の冒流ぼうりゅうだよ」

まるで国語教師みたいな言い分だけど口調はあくまでもクール。怒っているわけではなさそうだ。

「なんの意味もなくお疲れ様、なんて使うもんじゃないよ。特に女の子を待たせた時なんかには
あ、前言撤回ぜんげんてつがい。フツーに怒ってる。

ごめん、と素直に謝ってみただけでも、彼女の耳に届いたのかは疑うたがわしい。興味はとつくに別の
ものに移っていたようだ。

「で、作ってきてくれたんだよね？」

テーブルに身を乗り出して期待に満ちた目でまっすぐ僕を見つめてくる。やはり疑問形ではな
くて断定されているのがどこか見透かされているようで落ち着かない。

「簡単なスケッチだけだね。メロディーとコードとガイドのリズム程度の」

ちよっと勿体つけてみる。このままイジワルに『おあずけ』してみたいものだけど、ホントは
僕自身、あの歌詞から生まれた曲を聴いて欲しくてうずうずしているわけで。

「いいよ。早く聴かせて」

肘をついたまま両手のひらを僕のほうに差し出す。さっきの不機嫌そうな様子が嘘のように、
今はお菓子を欲しがる子供みみたいな表情。そんな顔もできるんじゃない。ポケットから出した携帯

プレイヤーをその手の上に乗せてあげると、ノートも、と催促された。

同じテーブルに向かいあっていながら、食い入るようにノートを見つめてイヤフォンに集中しているジェイデイと、かたや居たたまれず手持ち無沙汰に窓の外を眺めている僕との間を、しさんが不思議そうに視線を行き来させてアイスコーヒーを置いていった。

しのさん、君にはまだ知らない世界があるのだよ。これが、放置プレイだ。

ジェイデイは自分で書いた歌詞を追いながら、僕の打ち込んだメロデイーに合わせて口ずさもうと試みていようだ。さすがにはじめて聴くメロデイーでは難しいだろうと思っていると、曲が終わるやいなや、間髪入れずにバックスキップのボタンを押してふたたび頭から再生を始めた。何も言わないということは、少なくとも百パーセントだめ、ということではなさそうだ。

彼女が最初から最後までメロデイーを口ずさめるようになった頃には、僕のグラスは水を残して空になっていた。一度も水をとかさずに、だ。

しのさん、新記録です。放置プレイって結構辛いです。

名残惜しくグラスの水をストローで突付いていると、やっとジェイデイがイヤフォンを片耳だけ外して顔を上げた。

「すごいすごい。面白い」

静かに興奮している様子が声から伝わってくる。

よっしゃ。してやったりの満足感。この一週間、毎日聴き返しては細部を修正して作り上げた

メロディーだ。最高傑作であると世界中に宣言してもいい——いつも曲が出来るたびにそう思っているのだけれど。

ここまでなんだかんだでコケにされてばかりだった分、一気に形勢逆転の気分だ。ガッツポーズなんかしたら負けだから、心の中だけでね。

「あくまでもまだデモだからね。アレンジでもかなり雰囲気変わってくるし」

鷹揚たうように言うことでミュージシャンぽさを上乗せうわのしてみる。ギョーカイっぽいっての？

でも事実、シンセサイザーを使った音楽では、メロディーよりもアレンジ、一般的に言う編曲へんきょくの部分がその曲の方向性に影響する度合いどあが大きい。

今のデモは抑え目のダンスビートにシンコペーションを効かせたエレピのリフとシンプルなベースラインで構成された、何者なにものともいいがたいスケッチだけど、このベースパターンをやや複雑なラインにしてやればハウス寄り、リフをアナログシンセに置き換えてやればシンセポップ寄りになる。

アレンジのさじ加減でよりポップにするかマニアックにするか、普段ならば僕の気分次第で決まるわけだけど、今回はそうもいかない。作詞者の意向いこうも反映する必要があるだろう。

それにライブと言っていた。そうなると楽器構成だつて考えなきゃならない。いや、それ以前に確認したいことはいくらでもある。

「気に入ってもらえたなら、質問してもいいかな？」

片耳のイヤフォンで曲を聴きながら頭を揺らして覚えたての曲を口ずさんでいる——良く見れ

ば両手で小さく指揮まで取っている、ゴキゲンな——ジエイデイの顔を覗き込んでやると、ん？と首をかしげて目顔めがおで返事をする。

「君と僕でライブって、本気？」

何を言われているかわからないようなきよとんとした表情で動きを止める。ほう、鳩まめが豆鉄砲まめでっぽうを食らった、って、こういうのか。

って、ちよつと待て、その反応、合ってるか？

「本気？ って——」

プレイヤーを停止してイヤフォンを外しながら、さも心外しんがいといった様子で口を尖らせる。

「だってキミ、曲作ってきたじゃない」

わかった。オーケイ。彼女の中ではとくに確定事項であり、僕の曲は承諾しょうだくの意として受け取られたようだ。何億光年かゆずってそこはまあ、いいとしよう。

だがプラネタリウムで、というのがまたわからないんだ。

ライブをするならばライブハウス、という専用の施設がご丁寧ていねいに用意されているし、この香澄コミュニティセンターにだって、お琴教室なんかをやっている音楽室だってある。そういえばドラムの音を聞いたこともある。それなりの練習スタジオ的な設備もあるのかもしれない。客を入れようと思えばライブの真似事まねごとができないこともないだろう。

プラネタリウムでコンサート、というのも聞いたことはあるよ。でもそれらはたいてい室内楽しつないがくやコーラスとか、なんというか、お上品なヤツだ——星空とギターの夕べ、とか、そういうヤツ。

間違つてもパンクス少女とやさぐれ青年の無軌道な青春の主張、ではない。

「だつて、楽しそうじゃない」

僕のそんな素晴らしい弁論も、彼女は一言で切り捨ててしまった。

「だいたい、星空とヒーリング、なんて組み合わせ、きもちわるい」

本気で癒されたければ本物の星を見に行けばいい。こんなもので癒されるくらいのことならお風呂のタイルの目地に生えたカビのコロニーを顕微鏡で覗いていたほうがよっぽど綺麗だろう。そもそもヒーリング、と称される音楽自体が可哀想だ。落ち着く音なんて万人が同じなわけがない。現にあの妖怪みたいな名前のシンセサイザー奏者の曲を聴くと体中の毛穴という毛穴にアイツのヒゲの先をねじ込まれるようでむずむずする。私が癒される方法は自分で決めて自分で実行する。それ以上のカタルシスつてある？

「だから、そんな既成概念をぶちこわしてやるのよ」

鼻息も荒くそうまくし立てる彼女の勢いが、正直痛快であり。まあ、わからなくもないし、つい楽しくなつてしまふ。

皆が平穩に生活するために、社会の役に立ちなさい。勉強して、いい大学を出て、いい会社に入りなさい。辛いのは君だけじゃない、不平不満を漏らすことは醜いことだ。どうして皆と同じように出来ないのか。どうして君だけできないのか。

——そうやって自分を殺して生きることをやんわりと強要され、それに抗う術もなく、ただただ違和感の中で崩れそうな自我をインチキのオブラートに包んで現実感のない生活を貪っている

僕は、ジェイデイのひたすらに自分の価値観を貫き通すその無邪気さが羨ましくなっていた。

イノセンス、と彼女は言っていた。純心無垢とは悪意を持たないことではなく、悪意を持つことさえためらわない誠実さ、なのかもしれない。

「確かに銀河鉄道の夜なんかより、プラネタリウムにはダフトパンクのほうが似合ってるかもしれない」

某宇宙刑事みたいなフルフェイスのヘルメットを被ったフレンチエレクトロ・デュオ。彼らが日本の大御所漫画家に猛烈にラブコールを送って作った『インターステラ5555』というアニメフィルムがある。彼らの最先端のデジタルミュージックをバックに、僕が子供の頃に熱中したアニメにそっくりな、どこかなつかしいキャラクター達が未来の宇宙で活躍する映画だ。

歯車とアナログメーターと光線銃。それらはいつの時代だって、わくわくする宇宙と未来に僕らを連れていくアイコンだ。カッコツケなカムパネルラとのタイクツな旅なんて、教科書で読めば十分だ。

「あ、それ賛成。子供にだって本物にふれる権利があるよ」

ジェイデイにもそのイメージは伝わったらしい。

あの小さなドームに満員の子供達を集めて『インターステラ5555』を上映したら、どんな反応をするのだろうか。

ジャンク寸前のあのスピーカーから流れる下世話なデジタルビートが彼らの皮膚を容赦なくビシビシと震わせて、その身体をはじめて本物の音楽が侵すのだろう。

半球のドームに歪ゆがんで投影された、僕が昔自分を重ねた少年と同じ顔をした青い皮膚のキャラクタの運命に一喜一憂いっきいちゆうし、宇宙に、未来に思いを馳はせるのだろう。

セリフも文字も一切排除いっさいはいじょされたあの映像が語るのは、見るのでも聞くのでもなく、ただ感じること。

誰かから提示されたお手本ではなく、己おのれの思うままに感じる、という表現行為。
なるほど、それが彼女のパンクなのか。

小さなドームを満たす音——僕の曲と彼女の声——を想像して。

久しく、忘れていた——忘れていたことにすら気付かなかった感覚が。

胸のポケットの奥でちりりとくすぶった。

僕はすっかりそのプランに魅了されて、うわの空で吸い込んだストローがずっと音を立てた。

そうだ、さっき新記録を樹立じゅりつしたばかりだった。

その音でジェイデイも我われに帰ったように僕を見る。

同じようなことを考えていたのだろうか、目が合った瞬間の空気がなんだか場違いに甘すぎて、ふたりして照れて笑い出した。

「じゃあ、善は急げってことで」

一瞬その場に漂った親密な空気を振り払うようにそう告げると、ジェイデイは急に席を立ってカウンターに向かい、そこでグラスを拭いていたしのさんに何かを頼んだ。

にこやかに応じたしのさんはレジ脇の壁に据え付けられた受話器を取り、どこかへ電話をかける。

何が善なのかよくわからないんですが、僕はまた一歩、彼女の広げた風呂敷ふろしきに足を踏み込んでしまったみたいです。ずぶり。

電話はすぐに終わり、カウンターに肘をついて待っていたジェイデイに右手でオーケーサインを作って返事をしている。

あの二人、意外と勝手知ったる仲だったんだろうか。癒し系天然ウエイトレスと暴走系パンク少女の組み合わせの会話って、どんな次元で成立するんだろう？

どう考えてもコントのようにしかならないやりとりを想像していると、ジェイデイがこちらに戻ってきた。

席に着くのを待って今のやりとりの内容をたずねようと思っていると、彼女は座らずにそのまま自分のバッグを手に取り、それをたすきがけにして

「さ、行くよ」

と、レジのほうへ歩き出してしまった。

え、ちよっ。

慌てて伝票と自分のバッグを掴んで追いつがるものの、先にドアを開けたジェイデイが振り返

り、「またすぐ戻って来ますから」としのさんに声をかけるのを聞いて、迷った挙句あげく伝票は上着のポケットに突っ込んだ。

しのさん、「いつてらっしゃい」とか笑顔で手を振ってるけど、食い逃げとか、そういうの大丈夫なのか。

「行くて、どこに」

勇者に引きずられる棺おけみたいにジェイデイの後を追う。

「決まってるでしょ」

ジェイデイはシャガールを出て、センターのロビーの方向に歩きだした。k

「まずは会場を押さえるのよ」

ロビーを斜めに突っ切ると、奥のエレベーターのボタンを押す。

「会場って、プラネタリウムを？」

「そんなの可能なのか？」 他の会議室みたいに時間貸してたりするのだろうか。丸いから、すまう相撲大会にちようどいいやと思つて、とか。いや、まさか。

「それは多分、ないね」

ジェイデイも素直に認める。じゃあどうするって言うのさ。

「キミの友達が面白そうなおモチヤを持っている。キミはそれで遊びたいけど、友達はそれを貸してくれない。さあ、どうする？」

「ころしてもうばいとる？」

「馬鹿。短絡的な暴力は動物以下の思考だよ」

あきれたように吐き捨てる。冗談だつてば。ゲームネタは通じないのか。

「借りられないなら、持ち主と一緒に遊ぶの」

ジェイデイがそう言うと同時に、チン、とチャイムが鳴り、ごとりと音を立ててエレベーターの扉が開いた。

乗り込むと彼女は迷わず三階のボタンを押す。僕らのライブ会場として白羽の矢を立てられたプラネタリウムのフロアだ。

えと、他に何があつたつけ。

会議室の予約なんかを受け付ける窓口は一階だったはず。もちろんその方法が選択肢にない僕らには最初から関係ないのだけど。

上昇を始めたエレベーターが、巻き込まれ続けている自分の運命をなぞっているようで急に不安になる。

「あの、僕まだライブやるって言つてないと思うんだけど」

「あれ？ でもさつきすぐく楽しそうな顔してたよ」

ジェイデイはいたずらっぽく微笑む。

そう言われてしまえば返す言葉もないけどさ。

決断を迫るように——いや、僕の意思にはまったくお構いなく進むこの事態を象徴するように

——エレベーターはあつという間に短い処刑台を昇りきる。チン。

今日の上映はすでに終わっているからか、フロアの照明は最小限に落とされ、ブラインドの隙間から差す夕日が人氣のない空間に窓際の観葉植物の影だけを映して、さながら魚のいない水族館のように静止していた。

漫画だったら「シーン」で書き文字が見えていただろう。

ジェイディは正面にあるプラネタリウムのエントランスには向かわずに、ドームを挟む形で平行に伸びた薄暗い廊下のうち、左手のほうへ進んだ。ドアに貼られたプレートには「機材室」「資料室」なんて書かれている。どうやらこの一角ではプラネタリウムの用具などを保管しているらしい。

いくつかのドアの前を通り過ぎると、突き当たりの直前にそれまでのスチール製のものとは違う、ダークブラウンの綺麗な木目のドアが現れた。

他の部屋と違い、プレートも貼られていない。

金色のドアレバーには艶がなく、ところどころ手の形に変色しているが、それがかえって安物のめっきではなく真鍮製らしいことを物語っている。

天然木で作られているらしいドアはその存在感だけでも十分に「関係者以外立ち入り禁止」の威厳を放っていた。

このドアでギターを作ったらどんな音がするだろう。

そんなことを発作的に夢想してしまいうくらい、とにかく僕らには場違いな雰囲気だ。ジェイ

ディは方向を間違えたのだろう。誰かに見つかったらホールドアップの猶予も無く蜂の巣にされるんじゃないだろうか。できればそんな事態になる前にここから離れたい。

窓から見える向かい側の廊下が目的地なのだろうと目星をつけて踵を返そうとするが、彼女はすでにドアレバーに手をかけ、扉を開いていた。

こんにちは、とジェイディが声をかけると、中からはマシンガンの雨ではなく、意外にも聞き覚えのある声がかえって来た。

「やあ、いらっしやい。こけしちゃん」

恐る恐る部屋の中を覗くと、奥の机に座っていたのはプラネタリウムでいつも見ている顔――星空解説の館長その人だった。

僕は頼りないくらいにずぶりと沈み込むソファに埋もれて、やけに低くて膝の置き場に困るガラスのテーブルの前で固まっていた。

なんなんだろう、この状況は。

一方、隣に座ったジェイディはパーカーのポケットに両手をつっこみ足を投げ出してリラックスしている。放っておいたら口笛でも吹きそうだ。

その肩が柔らかく僕の右腕に当たっており、髪からか服からか、なにやらミルクのような甘い香りがただよっており、それを変に意識してしまっており、ただでさえ居心地の悪い状況で僕は

身じろぎ一つできなくなっており。

プラネタリウムで見ていた時は何か芸能人のような遠い存在に思っていたけれど、テーブルを挟んで座った館長は、あらためて対峙^{たいじ}してみると僕の通う大学の教授とたいしてかわらない、人の良さそうな小柄な初老^{しよらう}の男性だった。姑息^{こそく}な代返^{だいへん}防止策を張り巡らせない種類の、でもテストの採点は妥協^{たきやう}しないので人気がない、みたいな。

ロマンスグレイを通り越して真っ白になった固そうな頭髮はぼさぼさに伸び放題なのに、暖かそうな起毛^{きもう}のブラウンのジャケットはしわもなく、黄色いシャツの襟元^{えりもと}に通されたループタイも含めて、総合的にはどこかオシャレだ。そこらの企業の重役なんかとは違う、いかにも学者然とした雰囲気^{ふんいき}を漂^{ただよ}わせている。あれ？ 学者？ 公務員？

不意にドアがノックされ、館長が応じると、意外なことにしのさんがトレイにカップを載せて入ってきた。

そういえばさつき電話でコーヒーを頼んでいたっけ。てっきり職員^{しやくいん}の女性^{にょせい}なんかが持つてくるのかと思っていたけど、来客^{らいきゃく}や会議^{かいぎ}の時にはこうしてシャガールから飲み物^{のみもの}なんかをケータリングでできるようになっているのだろう。

なるほど。ジェイデイがしのさんに頼んで電話をかけてアポイントを取ったのもそんな仕組みを知っていたからか。

あれ。なんだか僕^{わが}だけ蚊帳^{かや}の外^{の外}のようで寂しいぞ。

「それで、今日はどうしたのかな」

しのさんが置いたコーヒーにミルクを入れながら、館長がジェイデイにたずねる。

「こけしちゃんと、君は——」

名乗ろうとするとジェイデイに肘を突かれた。黙ってる、ということか。

館長は僕の頭から膝に置いた指先までゆっくりと眺めると、

「——そうだな、君はシオマネキ君だ」

僕の前にコーヒーを置こうとしていたしのさんの手がぶれて、カップがカチャリと小さな音を立てた。

同時にジェイデイが小さく噴き出したのも聞き逃していない。

ちよつとなんなのこれ。失礼しちゃうんじゃないの。

「館長サン、新作ですね」

ジェイデイの前にカップを置きながら、しのさんが笑いも隠さずに説明してくれる。

「館長サン、人の名前覚えるの苦手だからって、勝手にあだ名つけちゃうんですよ」

こけしちゃんの命名はしのさんじゃなかったのか。どこかズレたセンスにやっと納得。

しかし僕、しおまねきってどういう——

「若者、君の右腕には今、左腕の何倍の神経が集中しているのかな？」

ジェイデイの肩が触れている右側の腕が急に熱くなる。ほほ、と笑いコーヒーをすすする館長。

評価訂正。このおっさん、スケベだ。僕もだけど。

「あんまりからかつちゃだめですよー」

しのさんには館長の言った意味がわかったらしい。からかうな、って言ってる声も冷やかし半分だよ。

ジェイデイはそんなやりとりを気にも留めずに、やはりブラックのままコーヒーを飲んでいる。「では、失礼しまーす」

給仕を終えたしのさんが戸口でぴよこりと頭を下げる。

「フラミンゴちゃん、またね」

相好を崩して手を振る館長。ああ、あのプラネタリウムのイメージが一面ピンクのフラミンゴの群れに塗りつぶされて崩れていく。

「はあい」と手を振り返すフラミンゴちゃんことしのさん。僕の方にも手を振って、

「またね、しおまね君」

そう言うのと、えへへ、と笑って出て行った。

一文字の省略がどのくらい環境保護に有益なのか知らないけど、またひとつ、しのさんに遊ばれるネタができてしまったようです。

とにかく、この状況。

ジェイデイはプラネタリウムの使用許可を館長直々にいただく気らしい。

たしかに馬鹿正直に手続きをするよりも話は早い。会話のノリから察するに、館長は堅物ではないようだし、どうやらジェイデイとも顔なじみのようだ——どんな接点があるのか謎すぎるけど。

今の雰囲気ならば、あるいはすんなり許可が出るのかもしれない。けれど果たしてその目的がライブでも、そんなに上手くいくもんだらうか。

「あと四ヶ月ですな」

コーヒーカーップを置きながらジェイデイが穏やかに話し始める。

敬語、使えるんじゃないか。

「そうだねえ」

館長はどこか懐かしむような目をしていた。

「この冬で終わりです。まだまだ先と置いていたのに、いつのまにか最後の季節になっていたねえ」
左手でソーサーごとカップを持ち上げて、添えた右手で日本茶のようにずずずとコーヒースする。

「まあまあ。私もあの子も、もうおんぼろだからね。春には暗いドームから出て、ゆっくりと日向ぼっこでもしながら過ごしますよ」

ほほほ。ずずずつ。結構なお手前で？

脳裏にはすでに縁側えんがわでお茶をすする館長の姿が浮かんでいた。

会話の内容から察さつするに、館長はこの春に引退するということらしい。まったく知らなかった。あの名物ライブ上映は終わってしまうんだらうか。

「春からは、プラネタリウムはどうなるんですか？」

置いてけぼりな僕がぼつりと素朴な疑問を挟み込むと、ジェイデイは体を引いて僕に振り向き、

心底あきれたような顔をした。

「え、キミ、いつも来ているのに知らなかったの？」

非難する調子のジェイデイの声に、ほ、と高い笑い声の一つ上げて館長が後を引き取る。

「あの子はもう三十年以上稼動かどうしてるからね。あちこちガタが来ているし、そもそも型も古くなって、上演できる番組も少なくなつとる。どこか壊れれば修理費も馬鹿にならないし、補修部品だつて手に入りづらい。三月いっぱいでお役御免やくごめんで一時休館。夏にはデジタル方式の最新機種に入れ替えるんですよ」

そういえばさつき見たパンフレットに「リニューアル工事に伴う休館のお知らせ」という記事があつた気がする。老朽化ろうきゅうかした機械と共に、これを期きに館長も引退、ということだろうか。

「次の機種はもうフルオートで上映できますからね。今よりも映像も演出もケタ違いに派手で、綺麗になりますよ。ドームも補修して音響も入れ替える。子供達もそのほうが楽しいでしょう。古臭い手動解説はもうおしまいです」

小さな館長の肩がすこしすずけて見えた。

「私、館長の解説大好きなのに。終わっちゃうのは寂しいです」

「ありがとう、こけしちゃん。それにあなた、しおまねき君もいつも来てくれているね」

あの暗がりの中でも顔は見えているのだろうか。さすがのベテラン。面と向かつて言われるのもなんだかこそばゆい。

「いつも気持ち良さそうに眠ってくれているね。解説員冥利みょうりに尽きるわい」

ほっほ。と笑う館長。

や、その。タイクツとかそういうんじゃないなくて。リラックスできるといふか、館長のその声ですわね。

つまみ食いを見つかった子供みたいにあわててフォローする僕を無視して、ジェイデイが本題を切り出す。

「それでですね、館長。私、考えたんです」

ほう、と乗り出す館長。彼女は姿勢を整えて続ける。

「館長の最後のライブ解説、私達のライブと一緒に盛り上げたいんです」

落ち着こうと口に含んだコーヒートを噴きそうになる。なんだって!?

——借りられないなら、持ち主と一緒に遊ぶの

プラネタリウムを借りるのではなく、館長までも巻き込んで——あくまでも体裁は館長のサポートという立場で——ライブを行おうというわけか。大胆すぎるだろ。

ジェイデイは「最高のさよならを」と言っていた。プラネタリウムと館長の引退を惜しんで最後の火花を打ち上げよう、という意図なのだろうか。もはやどこまでが本意でどこからが策略なのかわからない。

何故そこまでこのプラネタリウムに入れ込むのだろう。館長やしのさんと親しそうなことも関係があるのだろうか。

しかし館長はそんな突飛な提案もにこやかに受け止めている。

「ほほう。それは楽しそうだね。こけしちゃんはピアノでも弾くのかな？ それともヴァイオリンかな？」

「いえ。私は歌とベースを。彼はシンセサイザーを弾きます」

「ベース!？」

驚きの声を上げたのは僕だ。

ライブをやりたいと言うからには歌はともかく、せいぜいギターか鍵盤でも弾くのだろうと勝手に思っていたけど、ベースは予想外だ。いや、三味線しゃみせんとかアルペンホルンとか言い出さなかつただけましなんだろうか。

「ほほう。シンセサイザーと、ベース……」

館長もいまいち想像がつかないようだ。無理もない。僕も想像できないもの。

「とりあえず、聴いてみてください。あのドームの星空の下で、館長のナレーションと一緒に流れたら素敵だと思いませんか」

ジェイデイは自分のバッグからCDを取り出して僕に手渡す。先日僕が彼女にあげた、僕の自作のものだ。

ここで流せ、ということか。この空気で僕の曲を。なんとという公開処刑。

館長だって忙しいだろうに、と助けを求めて顔を見るが、意外にも興味深そうな様子で、あれを使いなさい、と壁際のチェストの上に置かれたミニコンポを示された。

こうなつては仕方ない。覚悟を決めてコンポに近づくと、隣に置かれた小さなラックの中身が

見えた。プラネタリウム用なのか、イーजीリスニングのコンピレーションが多いみたいだ。

いくつか古いジャズの作品も混ざっている。そちらは趣味のものかもしれない。だとすると電子音楽には否定的な可能性もある。こりゃ厄介やっかいかもだ。

ジャズってなんだかインテリ臭がするから苦手なんだ。いつそのこと演歌でも聴いていてくれたほうが楽だったよ。

イジェクトボタンを押すと、出てきたトレイにはキースジャレットのコンサート音源が乗っていた。この手のものをほとんど聞かない僕でも名前を知っているくらいの有名なジャズピアニストだ。

せめてハービーハンコックだったらまだ相互理解の余地はあったのに。
暗澹あんたんたる気持ちで僕のCDをトレイに乗せる。

ジェイデイを振り返ると、クラウデイ、と小さく呟いた。

オーケイ、もうどうにでもなれ。

やけくそ気味に再生ボタンを押してソファに戻る。

デイケイの短いシンセと深いデイレイが刻む四小節のリフがループする。

木目の壁に囲まれた臍脂えんじのじゅうたんの部屋でふかふかのソファに埋もれて聴く僕の曲はなんだかとても安っぽくて、床から三十センチくらいの空中をうすっぺらく漂っているようだった。

もうこのままソファを突き破って床下まで沈みこんでしまいたい。

館長は両手を肘掛に乗せて目を閉じて聴いているようだ。深い皺の刻まれた顔からはなんの表

情もうかがえない。

短いイントロが終わり、歌が始まると、ジェイディは急に立ち上がり、ドアに向かって歩き出す。まさか、いたたまれなくなつて逃げるのか？　と思つてみると、ドアの横のスイッチを操作して部屋の照明を消したのだった。

「ほほ。これはこれは」

ブラインドの隙間から差し込む細い夕日が、壁に床に光のストライプを描き、磨き上げられた机や装飾品に反射して、天井に不定形の波紋を描き出す。

窓の外の木の葉が風に揺れ、机の上のクリスタルの文鎮や壁に掛けられた額縁のガラスがプリズムとなり、七色の光のアーチもそれに合わせてきらきらとまたたく。

そつゆらりと泳ぐような

暗闇からその先へ

なつかしく寄り添つた

未来なら踏み出して

そつフワリと浮かぶような

終わりからはじまりへ

その間つなぐほら

未来なら鳴り出して

ループするシーケンスのフィルタが徐々に開いていくのに同調して、床上に漂っていた音が足元から厚みを得て、胸を、頭を、越えて、天井に達する。

サビのフレーズが、即席の四角いプラネタリウムを満たしていた。

ガラスのテーブルに反射した青と黄緑の光で浮かび上がった館長の顔は、ドームのブースの小さなライトに照らされているときと同じ、満足そうな笑顔だった。



「カニ君、あとでこけしちゃんと一緒に私の部屋においで」

そう館長に呼び止められたのは翌週の水曜日、いつものようにプラネタリウムを堪能たんのうしてシャガールに向かおうとした時だった。

いつの間にかシオマネキからただのカニにランクダウンしている。館長のあだ名付けはわりと適当らしい。できれば早く甲殻類こうかくるいから卒業したいが。

呼ばれた理由は考えるまでもない。ジェイデイが持ちかけたライブの話だろう。ジェイデイはなんだか必死だし、館長の反応も悪くなかった。

僕はというと、じつは一週間経った今でもどうなったらいいのかよくわからない。冷静に考えるまでもなく無茶な提案だし、正直なところ面倒くさい気持ちも強い。

「ただドライブがだめになったら、ジェイデイとはもう会えないだろう。」

別にいつもの生活に戻るだけだ。何も変わらない。そうは思うものの、なんだろうこの、割り切れなさは。

結局答えは見つけられないままジェイデイと落ち合い、館長室へ向かった。

「さあこれです。みてください」

僕たちを嬉しそうに迎え入れた館長は、ホチキスで綴じられたコピーを手渡してきた。

表紙を見た僕は詰めていた息を吐き出した。安堵。これが僕の気持ちか。

冒頭に「プラネタリウム特別上映『ライブ&ライブ』」と書かれたそれは、どうやら企画書のようだった。

来年三月の最終日曜日、十五時から一時間の上演。入場無料。次世代を担う若者のライブ演奏と星空解説とのコラボレーションで、プラネタリウムの世代交代のイベントとする——そんな企画概要と、ドーム内のセッティングやタイムテーブル、必要機材のリストなんか書かれていた。会場はもちろんここ香澄ビーむ。プラネタリウムの投影機材の搬入用にドームの北側と南側の座席の一部は可動式になっているらしく、南側の座席の一部を取り払い、そこをステージにするプランのようだ。

「企画会議でね、これ、通ったんですよ」

館長は満足そうに微笑む。

「もともと最後の日曜日には何か企画を行う予定だったんです。他の職員は私の引退セレモニーのようなものを考えていたようですが、そんなにしんみりするよりも、私はこういう、次にバトンを渡すようなイベントがやりたくてね。君たちの音楽を聴かせてもらって、これならば次の世代への期待を込めた楽しい幕引きができる、と。いただいたCDを会議で流した時はみんなポカーンとしてましたがね」

ほっ。と一声。笑うと目が糸のように細くなる。

館長は見事にジェイデイのプランに乗ったのである。

館長、詐欺とかにはくれぐれも気をつけてくださいね。

タイムテーブルを見ると、上演冒頭の夕暮れから夜の星空への転換時に一曲、中盤で季節の星空の移り変わりを上映しながら一曲、終盤の星空から朝焼けへの転換で一曲、計三曲が僕らの演奏時間として割り当てられていた。

想像して身震いする。どれも観客がドラマチックに移り変わる星空のため息をつくハイライトシーンだ。そこに僕の音楽が、演奏が。ちよつと、ホントにいいのこれ。

あまりの現実味のなさになんと声を上げたら良いのかわからず、助けを求めるように隣のジェイデイを見ると、彼女はどこか不満げな表情で企画書を見つめている。

「館長さん」ジェイデイが企画書の図面を示して問いかける。

「私達はドームの南側に立って、北を向いて演奏するんですか？」

「そうだね。イベントは晩冬から春、春から初夏への夜空を紹介するから、冬の大三角形と春の

大三角形が南中を通過するおいしい季節だ。スピカと土星と月が最接近する春の星座を背に君達が演奏する。素敵じゃないかね」

ん？ と僕に意見を求める館長。しかし悲しいかなプラネタリウム暦半年にして万年居眠り常習犯の僕には、具体的な星座の具合はわからないんですよ。わからないけど、自分達が演奏している背後で星空が移り変わる様を想像するだけで、ガラにもなくウツトリとしてしまう。

「ここ。こっちに、なりません？」

脳内ライブ開催中の僕を無視してジェイデイは話を続ける。ここ、と指差しているのは図面上の館長のブースの脇、ドーム北側の部分だ。

「そちらも座席は取り外せるから出来ないことはないね。だけど私のブースがあるからやや狭くなるし、南側と比べると星の動きもおとなしめになるから、あまり見栄えがしないかもしれないよ」

「いいんです。私達が南側に立ってたら、お客さんからせつかくの星がみにくくなっちゃうし。ね？」

と、僕に賛同を求める。彼女にしてはなんだかはざれが悪い気がするが、まあ僕には特に反対する理由もない。北だろうが南だろうが、演奏できれば御の字だ——あれ、いつのまにか乗り気になってるし。

考えておきましょう、と館長は彼女の意見を引き取った。

「よろしく願います」

頭を下げるジェイデイ。慌てて僕もそれにならう。

「ほほ。そんなにかしこまらなくてもいいよ。楽しいイベントにしましょう」

館長は草を食むラクダのようにうなずく。細かいスケジュールなどはこれから詰めるので、決まり次第随時声ずいじを掛けてくれるという。代表として僕の連絡先をあずけておいた。

そして四日後の日曜日。

窓際に置いたパイプ椅子にまたがって、いじけた大型犬みたいに外をながめているジェイデイの影がだたっ広い床を斜めに横切り、ジャズコーラスのキャビネットに唇を尖らせた横顔を映している。

冬らしい濃密のうみつな夕日が、コミュニティセンターの音楽室の空気をあまつたるい餽色あめいろに染めあげていた。

放課後の教室、夕焼けに照らされて窓際で物思いにふける女の子、それを眺める僕。なんて高校時代のドキドキシチュエーションをオーバーラップさせてしまうが、BGMは遠くに聞こえる吹奏楽部のドヴォルザーク、ではなく、ジェイデイのお気に入りだというCDのノイジーなギターサウンドであり、そんなノスタルジーを粉々こなこなに吹き飛ばす。

僕の部屋の倍くらいの広さのこの「音楽室」には、ドラムセットとアップライトピアノ、ギターとベースのアンプ、十六チャンネルのミキサーとそれに繋がったモニタスピーカーなんかを置かれていた。

一般的な時間貸しの練習スタジオとなんら遜色のない立派な設備だ。

そこに僕とジェイデイの二人、そして僕が家から自転車でひいひい言いながら運んできたJUNO・106がスタンドに乗せてセッティングしてある。

すぐにも演奏を始められる状況だが、この部屋に入って三十分。

まだなにもしていない。

機材のセッティングを終えた後、僕はずっとこうしてふてくされたジェイデイを眺めていた。

普通の練習スタジオならば一時間二千円は取られるだろうこの部屋で、贅沢ぜいたくに時間を過ごしているのは——ジェイデイがご機嫌ナナメなのは——決して僕が悪いわけじゃないぞ。

ライブ企画書の説明の後、館長は僕らをセンター内の音楽室に案内し、無料で練習に使って良
いと言ってくれた。

もともと市民が利用できるように整備され有償ゆうしょうで貸し出されているのだけど、あまり予約はな
く、専ら館長が暇な時に音楽を聴くのに利用しているのだという。職権乱用しよくけんらんようってやつじゃないで
すかそれ。

しかし柵からぼた餅、とでも言うのだろうか。ライブ会場だけでなく練習スタジオまでとんと
ん拍子に確保してしまった。

いやあ、こんなことってあるもんなんですな。

早速さつそくジェイデイと予定を確認し、次の日曜の夕方に使わせてもらうことにした。

巻き込まれる形で始まったこの状況だけど、こうして現実味を帯びてくるといやがおうにも気持ちは盛り上がってきってしまう。単純なもんだ。

そもその発端はジエイデイだ。彼女のプランと作戦が館長を動かしたのだ。さぞや得意げな顔で笑っているだろうと見ると、意外にも彼女はまたもや難しい顔で企画書を眺めていた。

「他に何か気になることでもありましたか？」

館長もそれに気づき声をかける。

「ええ」彼女はタイムテーブルを指差しながら言った。

「あと二曲くらい……増やせないかなって」

ちよ、ちよつと。なんで勝手にハードル上げてるの。

青ざめる僕と、「ほほほっ」と満足そうに大声で笑った館長。

「まあ、おいおい考えていきましよう」

という返答にしぶしぶうなずいたジエイデイ。

そして今日、こうして僕とジエイデイはこの音楽室に第一回目の練習のために集まったわけである。

まだ本番で演奏する曲目も決めていないけど、とりあえず僕の曲の中でも比較的コードも展開も覚えやすい『Cloudy』から練習しよう、と、ジエイデイには伝えてあり、彼女もそれを了解していた。

それなのにまだ、一度も音を合わせていない。

なんでかって？

理由は簡単だ。まったく簡単だ。

ジェイデイが楽器を持っていないから、だ。

彼女は今日、手ぶらでやってきたのだ。びっくりだ。

曰く、「ドラムもピアノも置いてあったから、ベースもあるんだと思った」と。

そして僕は大きな勘違いをしていたことに気付く。

いや、彼女の態度が自然すぎて、あたりまえの確認をしていなかったのだ。

半ば最悪のオチを予期しながら恐る恐る聞いてみた。

答えはこうだ。

「ピアノカを小学校で習ったくらい。吹いてるフリは得意だったよ」

そうです。彼女はベースはおろか、楽器経験がほとんどなかったんですよ。

じゃあこれまでの態度はなんだったんだ。

ライブをやるうと言い、曲を作れと言い、ベースを弾くと言った自信満々の態度は。

館長まで巻き込んで事態を進行させておいて、蓋ふたを開けてみればこれですよ。

だいたいこんな得体えたいの知れない女の子に乗せられて舞い上がった自分が情けないったら。

仕方がないのでとりあえず歌だけでも練習してもらおうと、とりあえず自分のシンセとマイク

二本をセッティングして、ミキサーに接続した携帯プレイヤーから用意したバックトラックを流

す準備をする。



そんな僕をしばらくものめずらしそうに眺めていたジェイデイだけど、ミキサーが乗せられたラックの中にCDプレイヤーを発見すると、いそいそと自分のカバンを漁り始めた。

「ここ、大きい音出しても大丈夫なんだよね？」

扉はしつかり防音された二重扉になっていた。窓際に張り巡らされた黒いカーテンも遮音のものようだ。多分壁も他の部屋とは違い、防音の施工がなされているのだろう。

そう答えると彼女はカバンから取り出したCDをプレイヤーに入れ、再生を始めた。

「おー。おー。やっぱ大きい音で聞かなくちゃねー」

言いながらミキサーのフェーダーを手当たり次第操作して、ボリュームを上げる。

サンプリング……ではない、多分既成曲のドラムソロの部分を、多分テープレコーダーで繰り返し録音して繋いで、多分それをギターアンプのエフェクトリターンに突っ込んで再生しながら、多分そのアンプと一緒に突っ込んだエレキギターをかき鳴らして、多分それに負けないように声を張り上げて歌って、多分マイク一本でそれらをまとめて一発で録音した、多分、曲だ。

「これ、友達の曲なの。かっこいいよねえ。デビュー前のレア版なんだよ？ 知ってる？ 今、リン・ミラーサウンドって名前で」

ジェイデイはドラムセットに歩み寄って、指先でスネアドラムの表面をコツコツと叩きながら喋り続けている。

全体的にレベルオーバーしたノイズの塊のようなサウンドの中で、あどけなさを残しながらも喉がつぶれんばかりに叫ぶ少女の歌(?)がギンギンと耳を刺す。

「ねえ」

声を掛けるが大音量の奔流ほんりゅうに負けて、ハイハットのペダルの構造きょうぞうに興味津々きょうみしんしんのジエイデイには届かないようだ。

「ねえー!」

指先のスナップで一気にCDのフェーダーを下げ、マイクに向かって怒鳴どなってやる。

キーンと、耳障りみみざわりな残響ざんきやう。

シンバルを力任せに平手で叩いたらしく、手首をぶんぶん振り回していたジエイデイが非難めいた顔で振り向く。

「なんでとめるのよ」

「練習は? どうするの」

いまいち真剣さの見えない彼女の態度に、無意識に語気ごきも荒くなってしまふ。

「だってベースないんだもん」

「歌だけでも合わせられるじゃん。オケはあるんだしさ」

「じゃあこれ聴いてからね」

そう言つてミキサのフェーダーを上げようとする。

おいおい、ちよつと待てよ。

「そもそもライブやるつて言い出しておいて、楽器持つてない、弾いた事ない、つて、どういふことなのさ」

我ながら嫌味いやみっぽい言い方になってるのに気付くけど、ああ、とめられない。

「それでよく演奏位置こつちに、とか、あと二曲、とかわがまま言えたね。本当にできるの？」
彼女は一瞬俯うつむいたように見えたけど、何事も無かったかのようにフェーダーを上げ——ただし先ほどの半分程度の音量で——壁に立てかけてあったパイプ椅子を窓際に持つていくと、そこに反対向きにまたがり、外をみたまま何も言わなくなってしまう。

そして現在に至るといわけだ。

まあ僕もその間、投げやりな気分でドラムセットのイスに座り、彼女の友達だというキンキン声の女の子の絶叫を黙って聞いていたわけだが。

こういうときになりふりかまわずにキレられない自分もどかしい。

もっと怒って感情をぶつけてもいいはずだ、とわかつてはいるものの、アタマでそう考えてしまっている時点で爆発のタイミングを逃してしまっている。

そうして後から思い返すとモヤモヤとした気持ちだけが胸の中で渦を巻いて、怒れなかった自分に余計に腹が立つのだ。

バスタラムの腹を蹴破りたい衝動を抑えて、太ももを強く掴んだ。

しかし僕が彼女をすっかりふてくされさせてしまったのは確かなのだらうけど、そもそもどうだ。悪いのは誰だよ。

てゆうかお前誰だよ。ジェイデイってなんだよ。さよならってなんだよ。

なんでこんな、会ったばかりのテキストな女の子の言うこと聞いてしまったんだろう。まあ、かわいいけどさ。ちよつと、な。

でもさ、君が言ったんだよ？ ライブやる、って。

弾いたことないんでしょ？ 練習しなきゃできないでしょ？

なんでこんなへんちくりんなCD聴かされてんの。

まあ良く聴いてみりゃ嫌いじゃないんだけどさ。もう。

なんつーの。あるでしょ、もつとさ。殊勝しゅしょうな態度つてのがさ。

やる気ないならやめよか？ ね？ やめよう。そうしよう。

ほら、館長んとこ行つて、ごめんなさいやっばできませんって言つてきなよ。

僕？ 僕は知らないよ。巻き込まれただけでもん。

そりゃさ、聞かなかつたよ。だつてまさか、弾いたことないなんて思わないもん。

でもほら、あの歌詞とか、良かったし。

曲だつていい感じにできそうだしさ。

なんか一緒にやろつて言われたらさ、楽しそうだし。

なんか気になるしさ。

かわいいしさ。ちよつと、な。

あーもう。もう。わかつた。そんなこと言つても始まらない。脳内愚痴ぐち会議終了。

いまさら館長に「やっぱりできません」なんて言えないんだ。

こっちのほうがオトナな分、丸く治めるには折れるが勝ち、だ。

「ねえ、ジエイデイ」

僕らの間には相変わらず破壊的な音楽が流れていたのに、その一言はやけに大きく響いて、沈黙していた時間の長さに気付かされた。

夕焼け空と一緒に窓枠のキャンバスに収まった彼女の首筋を見るのがなんだか気まずくて、僕はシンバルの表面（ひょうめん）に同心円状に刻まれた溝を数えていた。

彼女の返事はない。

「ねえ」

聞こえているはずだけど、応答なし。もしかして眠ってしまったのだろうか。

まさかそこまで図太いの？

「……こけし、ちゃん？」

そう呼んでみたのと同時に、『病院、行つてきまーす！』と能天気にか歌っていたCDの演奏が唐突に終わった。

数秒の沈黙。

「……今度その名前で呼んだら二度と口聞かないからね」

そのままの体勢で振り返りもせず答える。なんだよ。聞こえてるんじゃないか。

「ごめん」なんだか理不尽ながらもとりあえず謝る。

「なにが」

背中を向けたまま。感情の見えない口調が逆に怖い。

「その、ちよつとカッとした。ごめん」

言わせたね。二度も言わせた。

ジェイデイはこつそり鼻をすすったようだけど、ぱつちりと聞こえてしまったよ。

「知らなかったし。教えてくれてもよかったし。学校の音楽室なら、隣の部屋になんでも揃ってたし。」

怒っているというよりは、どこか悔しそうにつぶやく。多分僕の言ったことに対して直接的に怒っているというより、自分の失敗が許せないのだろう。若いつて面倒くさいね。

「でも」

ジェイデイはそう言って大きなため息をついてから顔を上げると、そのまま両手を上げて大きな伸びをした。

「そういえばベースは、見たことなかった」

言いながら立ち上がると、椅子の座面ざめんを掴んで後ろ向きにずると引きずり、部屋の中央付近に立てたマイクスタンドの前へ持つていく。

スタンドに向かつて座ると、思うように動かないブームに四苦八苦しくはっくしながら高さを調整して、マイクの表面を上下左右から調べ始めた。長いブームを両手で掴んでマイクを右にやって頭は左に。首を伸ばして上から覗き込み、今度は窮屈ききゅうくつそうに身体を折って裏から。

ああ、スイッチないよ、それ。

ミキサのフェーダーをそつと上げてやると、指の先でトツトツとマイクを突付き、僕のほうをちらりと恨めしそうに睨む。

「歌うよ。ほら。」

さつきまでふてくされていたことなど忘れたように急かしてくる。

わかったよ、と視線で答えると、照れたようにぶいっと顔を横に向けてしまった。

くそ。そういうところがかわいいから放っておけなくなるんだ。

彼女の歌はまあ格別上手い、というものではなかった。これは予想の範疇。カラオケならば中の上、リクエストするならばバラードは避けて勢いで誤魔化せるアップテンポなやつで、って感じ。それでも倍音を多く含んだ太くて芯の通った声は心地よくて、変に癖の無いどこか不器用な歌い方も、かえってライブ向きなんだと思う。音程もリズムも大きな問題はない。固さが抜ければいい感じになるんじゃないだろうか。

そう言つてやると「ふうん」と興味なさそうな返事をしたけれど、急に立ち上がって続けて発声練習を始めた様子を見ると、まんざらでもなかったみたいだ。

今回はもともとベースを入れるアレンジを考えるために時間を使おうと思つていたから、オケは一曲しか用意していなかった。

三回も歌えばやることはなくなってしまう。

部屋は二時間予約しているから、あと一時間近く残っている。

ここで終わりにして退室してもいいけど、館長が便宜べんぎんを図ってくれたことを考えると、それも印象が悪い気がする。音楽室の予約を入れたときに対応してくれた職員さんも「楽しみにしてますよ」って声をかけてくれたっけ。

そういうばさもそも、どうしてここまでトントン拍子で話が進んでいるんだ。

そうだ。ジェイデイが館長と知り合いだったから、というのが大きな要因だろう。むしろそうだったからこそ、彼女はこんなことをやろうと思ったんだろう。

「ねえ、ジェイデイ」

床に広げた歌詞ノート——もちろん僕のだが——を、イスに座ったまま身体を折り曲げて読みながら、前髪を止めたヘアピンを直していた彼女は、そのまま首をこちらに向けて「ん？」と応える。口元にはヘアピンを2本くわえていた。大工か君は。

「館長とは知り合いなの？」

館長室でのやりとりを思い出しながら素朴な疑問。館長は「ひさしぶり」と言っていた。少なくとも最近知り合ったわけではなさそうだ。

「んーんんっん」

ほら、ヘアピンくわえたまま喋るから言葉になってない。多分「ちよつとまって」だ。

鏡もなしに前髪をまとめていくのを眺めながら、女の子って日常生活レベルで器用だなあ、とか、関係のないことを考える。ほら、三つ編みとか、ピアスとか、ブラジャーとか。面倒臭そう。

男でよかった。

「おじいちゃんがね」

へアピンを差し終えて、広げた手のひらでぼんぼんとおでこのあたりを叩きながら話しはじめた。「ここの技師ぎしだったの。プラネタリウムのね。だから小さい頃によく遊びに来て、館長さんはその頃から館長さんで、その頃私おかつばで。だから」

ああ、それで。前髪の出来に満足したらしく領いてこちらを向いたジェイデイの顔に、おかつば頭の幼いこけしちゃんの面影おもかげを探してみる。拗すねて口をとがらせた小生意気な表情の子供しか思い浮かばない。もちろんこれは口には出さない。

「中学生くらいまでは毎日のように通ってた。おじいちゃんが体調崩して引退するまでね。館長さんの部屋の隣がおじいちゃんの仕事部屋でね。いつもそこでレンズを調整したり、スライドを掃除したり。見たことのない道具が沢山あって、幼い私にはちよつとしたおもちゃ箱みたいだった。私はおじいちゃんが仕事をしている横で、いつも本を読んでいて」

揃ももえた腿ももの両脇で椅子の座面を掴み、床の上をなぞるつま先を見つめながら喋るジェイデイは、どことなくいつものトゲが抜けたような柔らかい表情をしている。良く通ったというこの建物と、窓から差す夕日が彼女をノスタルジックな気分きぶんにさせているのかもしれない。

だけど。

幼い頃から中学生時代まで毎日のようにここに通い、そこで過ごした彼女。おじいちゃん子にしても極端きわなんじゃないだろうか。

遊びたい盛りの頃だ。僕なんかいつも誰かとつるんで遊び歩いて、駄菓子屋のゲームのコイン投入口に分解した電子ライターの発火部品をどのような角度で当てたら良いか研究していた頃だ。良い子は真似しないように。

女の子だから、というわけではないだろう。彼女の話には友達の話には友達の姿が見えないんだ。少なくともさっきのCDで歌っていた女の子は友達だと言っていたはずなのに。

それに友達が少ないからといって、家にこもらずにここに来ていたというのもちよつと不自然だと思う。親は共働きだったのだろうか。それはめずらしくもないのかもしれないけれど。

まあそこを指摘できるほどの仲ではないし——だって知り合って一ヶ月も経っていないのだ——あまり話したい内容でもないだろうし。

「おじいちゃん、絵が得意だね。本当は画家になりたかったって。プラネタリウムで使うスライドとかの絵を描いたりもしてたんだよ。神話に出てくる神様や動物なんて想像で描くしかないから、身近なものをモデルにして描いてたり。いっかくじゅう座なんて、手塚治虫の漫画見て描いてたもん」

クスクスと笑いながら、彼女の回想は続いている。

「じゃあ、今でもここのプラネタリウムでその星座絵が使われてるの？」

「多分ね。いくつかは。それほど壊れるものじゃないから残ってるはず」

ほう。次の星空解説では気になって見てみよう。

「いっかくじゅう座と、他には？」

そう尋ねると、少し寂しそうな顔をした。

「わかんない。私、小さかったし。自動展示で使うストーリーの絵を描いてたほうが多かったから。昔から描いてたみたいだから、星座絵も私が見てたよりも沢山あるんだと思うけど」

一呼吸置いて、付け加える。

「おじいちゃん、おとし、亡くなっちゃったし」

もしかすると今見られる星座絵の多くが、彼女の祖父のものかもしれない。

「じゃあその、おじいちゃんとの思い出の詰まったプラネタリウムがリニューアルするって聞いて、お別れのライブを思いついたの？」

彼女が『最高のさよならを』と言ったのはそういうことなのだろう。

一時休館とはいえ、リニューアルで彼女の祖父が手がけていたプラネタリウムの投影機は撤去されてしまい、星座絵も使えなくなってしまうのだろう。館長も引退する。彼女にとっては、思い出の場所がなくなってしまうのだ。

「ちょっと、違う」

そう答えた彼女の表情に、ふと影がよぎった気がした。

「お別れじゃないの。さよならする、だよ」

きっぱりとそう言われても、僕にはその違いがよくわからない。

「どういうこと？」

「『さよなら』はね、去っていくものを見送るんじゃないの。後悔しないために、だせい情性のいぞん依存で

感情をもてあそばれないために、想いを断ち切るの」

いつの間にか彼女は、いつもの強い意志の宿った表情に戻っていた。

「この世界は楽しいことが沢山あるよね。ちよつと気を抜いたらすぐに楽しいモノ、楽なコトに心を奪われちゃうの。私だって自分でしつかりしてるつもりでも、まだ十八年しか生きてない子供だから、自分にとつていいものと悪いものの区別なんて冷静に判断できないの。だからといってそれに甘えて、何か大きなチカラに次から次へと押し付けられる幸せに浸って鈍くなりたくない。好きなものや大事なものは自分で選びたい。鋭く、純粹に、生きたいの。だから、大好きなもの、必要なもの、そう思ったものは」

ちよつと間をおいて、宣言するように。

「一度全部、さよならするの」

そうして私はイノセントになるの、と続ける彼女に、何度目だろうか、僕は圧倒されて——いや、魅了されて、というべきか——半分も理解できなかった彼女の理論をフル回転の脳みそで反芻する。

つまり、一般的にこう、平和で満たされた生活に飼いならされるのはごめんだ、ということだろうか。それにしても彼女の意見は極端だし、それに——

「それは、寂しくはないの？」

単純に、思う。

好きなものを排除していったとして、その後はどうなるんだらう。

世俗せぞくを捨て、僧侶そうりょのような禁欲きんよく的な暮らしをするのか。それが鋭く、純粹に、ということなのか。……いや、我ながら違う気はする。

「寂しいよ。寂しいし、痛い」

でもね、と彼女は続ける。

「そうやって痛みを知らないで、それが自分にとってどれだけ大事なものだっただけなのか、わからないでしょ」

「それは想像じゃだめなのかな？ これを失ったらつらい、っていう想像で胸を締め付けられる、とかさ。だから守りたいって、手放したくないって思ったり」

なんとなく自分が出家しゅつげすることを想像してしまい、今の生活を思い返す。

冷蔵庫のプリン、先週発売になったロールプレイングゲーム——新作を四年も待ったんだぞ。楽器、パソコン、大学、と、一応、家族？ あ、あとその歌詞ノート。

——あれ。僕が守りたいものってこんなもんか？

「その想像をしているキミの価値観に、それが絶対的に自分の判断で生まれたものと自信が持てるならそれでもいいよ。でも、私には無理」

彼女にしては弱気な表情で、うつむいて首を振る。

「それに」

そして小さく

「それに、さよならするまえに、突然奪われることだってある」

そう呟いた。

いつも強気にまくし立てる彼女の態度に、ともすれば自分より年上のような錯覚を抱いてしまっているけど、理不尽な悲しみと悔しさを滲ませたその一言を呟いた彼女は、宝物を取り上げられた幼い女の子のようである。

少女時代におじいちゃんここで過ごしていたという彼女は、きつとこんなふうな顔をしていないんじゃないか。そう想像して、少し彼女の認識を改める。

彼女の強気な態度や、『さよなら』に込められた強い意思の裏には、何かつらい経験が隠されている。

それを確信するが、僕には生憎、それを問い詰めて受け止めるほどの甲斐性はなく、彼女をなぐさめる術も持っていない——そうすることが正解なのかもよくわからない。

窓から差し込んでいた夕日が建物に隠れたのか、ぐるりと光源が移動して、逡巡している僕の足元に伸びていた彼女の影が、追及を避けるように掻き消えてしまう。

「そう、キミはきつとカードゲームとか弱いよね」

唐突に飛躍する話題と、打って変わった明るい声に虚を突かれる。そしてそれが表情に出てしまふ僕は壊滅的にカードゲームが弱い。図星です。

「手札に強いカードがあったらそれを大事にして、結局使わないまま負けちゃう。そんなんじや

ない？」

多分それも凶星。僕は慎重なんだ、つてのは言い訳にはならないだろうか。

「親から配られた手札てふたをやりくりして勝って『運がいい』と思うのはいいよ。けどその運も使えなかつたら意味がない。持てるカードの数は決まってるし、勝つために必要なカードも決まってる。余計なものはいらないの。それに運に頼るなんてのはそもそも必勝法じゃない。自分で引いたカードだけが自分の力。だからドロウ・オール。一度全部捨てて、自力で手にしたもので勝負を組み立てる。そうやってはじめて、本当に必要なものが見えてくる。必要なら取り戻したいと思うし、そういうものは多分、絶対に、必要になったときにまた出会えるようになってる。それを運命、と言うのも自由だけど、一度手放すという選択をすることで初めて自分で手に入れたと感じられるものだし、そうすることでそれはきつと、もつと大事なものになる。私、頭いいほうじゃないから、そうしないとわかんないの」

頭がいいほうじゃない、という彼女の繰り広げる理論が理解しきれなくて自分の頭がやや心配になってくる。そんな難しいことを考えて生きていないんです。流されるままに生きてきました。それはそれで多少の不満はあるしこれが幸せだとはいえないけれども、概ね不便おおひはしていない。なんだか申し訳ない。

どうやら彼女の行動には、僕なんかには理解の及ばない重要な理念があるようだ。

「じゃあ、北側で演奏したいって言ったのも、そんなふうな理由が？」

館長が南側をステージにしようと考えてくれたのには演出上の理由があった。それを覆くつがえしてま

で北側にしたい、というのには、彼女の『さよなら』に必要ななんらかの重大な要素が絡んでるのだろう、と想像するのだけれど。

「んー。そうだ。キミはなんでいつも南側に座ってるの?」

質問を質問でかえされた。ずるい。

けどまあ、それはごく合理的でつまらない理由。

プラネタリウムに通い始めた頃は、ものめずらしくて館長の説明を今よりかなり熱心に聞いていた。解説では星座の位置を説明する時、まず北極星を基準として東に、といった具合で星を探していくということに気付き、館長が「北極星を——」と言ったときに首をひねって探さないでいい席——南端の一番奥の席——が特等席だ、と分析したわけだ。それと。

「中心が見えると落ち着くんのだ」

北極星は地球の地軸上にあるから、自転する地球から見ると北極星を中心に他の星座が回転しているように見える。季節が変わっても——つまりは公転によって地球の位置が変わって、夜に見える星空の方角が変わっても——地軸上に位置する北極星の位置は変わらず（実際には動いているのだが、距離が遠いために認識できないほどらしい）、そのため他の星座を探す時の基準になつていなのだ。って、これは館長の説明の受け売りだけだ。

たとえ対象を見失ったとしても、基準点の位置さえ把握しておけばそこからたどって探し出すことができる。それが見える位置、っていうのが安心するのだ。僕は。

人生においてもそう、かもしれない。

多分何かの基準をみつめて、上か下か。右か左か。そうやって分類することで安心したり、怒ったり、悲しんだりするわけで。

「心配性。本末転倒だね」
ほんまつてんどう

彼女は僕の答えを聞いてクスリと笑う。あれ。なんかバカにされてんのか、これ。

「中心を見てたら回りの動きが見えないでしょ。よく動くところこそ楽しいところ。そして一番大きく動くのはいつでも中心から一番離れたところ。遊園地の海賊船かいぞくせんだってそうでしょ？」

指先でぐるぐると空中に大きな円を描いてから、目の前のマイクスタンドに気づいてそれを掴んで続ける。

「キミはわざわざ一番離れたところから中心を見て、自分の認識がずれていないか不安がって、振り回されて怖がってるの。基準からの距離や角度に気をとられてたら、自分の足をじっくり観察できないでしょ。見るべきところは、ここ」

マイクスタンドのブームを水平に回転させ、その先のマイクを指して、ここ、と。

「それに、そうやって遠くから見ている限り、キミは中心にはなれないんだよ」

再びブームをぐるぐると回し、頭を低くしてその下をくぐって

「中心を見つけたなら、こうして中に入って」

マイクスタンドを抱きかかえるように立つと、手を伸ばしてホルダーからマイクを抜き取り

「自分が中心になれば、ほら、好きなだけ眺められる」

両手でマイクを握り、今度は自分がクルクルと回りだす。

「そして自分が中心なら、全てのモノは常に自分から等距離とうきよりに存在するんだよ」

そのために私は一度全てのモノとの関係を壊して、順序だてて再構築する必要があるの。

回転しながら部屋のなかを踊るように移動し、ケーブルが足にからまりかけてあわてて振りほどく。

「だから君はいつも北側の席にいるのか」

「そう。私が北極星なのだ」

右手に持ったマイクをびしっ、と僕のほうに突き出す。

「そしてこれがキミだ」

僕の運命は彼女に握られている、というわけですか。

サリンジャーになったり北極星になったり、まったく大胆かつ無節操むせつそうな話だ。

「そもそも南の空が一番星座の移り変わりが大きいから、プラネタリウムでは北側の席のほうが楽しいんだよ」

ってのは、おじいちゃんに教わったんだけどね。と、付け加えて彼女は屈託くつたくのない笑みを浮かべる。祖父のことを話す時はどこか緊張が解けたように無防備になる瞬間があるみたいだ。

「だったらやっぱり、館長が言うとおりの南側をステージにしたほうが綺麗なんじゃないの？」

そう言う僕に一瞬口ごもる。眉毛のあたりが困ったような形を作るが、ため息を一つつくとき底あきれたような顔で首を振る。

「……バカね。一番綺麗なところ、私が見れなきゃ意味ないじゃない」

何か強がっているような口調だけど、どうやら彼女の『さよなら』は、本当に根本的に絶対的にプラネタリウムのお別れの儀式ではなく、彼女による彼女のためのセレモニーのようだ。

やれやれ。

結局そんな話をしていううちに、残り時間はわずかとなった。

ジェイデイにマイクやスタンドの片付け方を指示しながら、僕は自分のシンセサイザーを片付ける。僕が持っている唯一のハードウェアシンセであるこのJUNO・106。八十年代中期に発売されたこのアナログシンセは、日進月歩に進化するサンプリング技術を駆使したデジタルシンセ全盛の現在ではまったくもって不便なやつであり——そもそもピアノやトランペットなんていうリアルな楽器の音なんか出せないのだ——しかもでかくて重くて、ライブなんかやるには多分向いていない部類の楽器である。

しかしこの独特なルックスと、現代のシンセでは出せない存在感のある音色は他のものに代えがたく、ほら、ギタリストもビンテージのギターを重宝するように、シンセだってこういうコダワリが必要なんだ。

ともすれば預金残高とシンセ雑誌の広告を思い浮かべてしまう自分にそう言い聞かせて、冬だということに大汗をかきながら自転車で運んできた。

けっこうな重労働だったのにたいして鳴らしもせずにかこうしてまた持って帰るのも、なんだかみじめなものだ。

それにしてもジエイデイがベースを持つていないんじゃ、この先練習にもならない。

「どうする？ ベース。買うなら付き合うけど。中古なら三万もあればそれなりの買えるよ。あとアンプに一万ちよいつてところかな」

市内にはまともな楽器店はない。買いに行くとなれば電車で三十分ほどの街まで出ることになるだろう。ジエイデイと肩を並べて電車に乗っていることを想像すると、ややこそばゆい気持ちになる。デートじゃんね、それ。

「えー。そんなお金ないよ」

巻き癖のついたマイクケーブルと格闘しながら不安げな声を上げる。ちっ。残念。

「キミのベースでいいよ。貸して」

「貸して、つて言われても、僕も持つてないよ」

「え？ じゃあキミの曲はどうしてるの？ 誰が弾いてるの？」

なるほどね。シンセで鳴らして録音したベースを、僕が弾いているものと思っただらしい。

しかし考えてみれば彼女にベースを買わせたとしても、弾いたことのないまったくの素人に、同じく素人の僕が一から弾き方を教えられるわけもない。ギターならば多少は弾けるけど、そもそもの基本が違うのである。そば打ち職人にラーメンを打たせるようなもんだ。いや、良く知らないけど。

「ねえ、ベースやめて歌だけにしない？」

「やだよ。手持ち無沙汰で恥ずかしい」

じゃあ振り付けでもあれば満足ですか。ぎりぎりの短いスカートでさ。

「そもそもなんで、弾いたこともないベースなのさ」

「だつてかつこいいじゃん。ダーシーとかさ、キム・ゴードンとか、フミちゃんとか、フルカワミキとか」

最初のはアメリカのオルタナティブロック大御所おおごしよの女性ベ이스リスト。二番目もアメリカの、こちらはパンクバンドの女性ベイスリスト。三番目は日本のニューウェイヴバンドの、やはり女性ベイスリスト。最後のは日本の若いロックバンドの女性ベイスボーカルの名前だ。

意外とミーハーな理由だった。しかもひどく雑食。

「あと、ベース上手くなったら、友達と一緒に演奏したいし」

「さっきのCDの子？ だったら最初からあの子とライブすればいいのに」

「あー。まあ、ね。それはそれってことで」

はい、と、ぶかつこうにまとめられたマイクケープルを僕の手に乗せて、くるりと背を向ける
と今度はマイクスタンドの収納に取り掛かる。

なんだか釈然としないけれど。

館長にもベースとシンセ、と伝えてしまっている以上、簡単に撤回てっかいするわけにもいかない。練習は彼女のやる気次第として、そもそも楽器と、指導をどうするか、だ。

僕の頭の隅にはさつきからチカチカと一つの答えが点滅しているけれど、それは違う。危険信号だ。罨だ。おどるほうせきとか出てくるほうのやつだ。

そこから目を逸^そらして他の可能性を探るものの、まとまらない思考に、巨大な毛塊^{けかい}がわさわさと僕の灰色の前頭葉で視界をさえぎるように割り込んでくる。

できればアイツに頼りたくはないんだ。

——けれどとても残念なことに、僕は他のベターなアイデアを思いつくことはできなかつたんだ。

——本編第三章に続く

オリジナル小説とイメージ CD のコラボレーション作品
「さよならサリンジャー」は
ボーカロイドマスター 18 (2011 年 11 月 19 日・池袋)
で頒布予定です

SWANTONE の今後の情報にご注目下さい

Official site <http://ninjaguy.jp/swantone/>

さよならサリンジャー

©2011 Kusemono(SWANTONE)

VOCALOID はヤマハ株式会社の登録商標です